

26C-am04

周辺立体環境因子によるアミドの活性化

○足立 慎弥¹, 熊谷 直哉¹, 柴崎 正勝¹ (微化研)

【目的】安定なアミド構造は単純な加溶媒分解においても一般に強塩基または強酸性条件下における加熱を要する。この安定性はアミド共役に起因することから、我々は従来の Lewis 酸型の活性化法から脱却し、立体因子を利用する脱共役型活性化法の開発を目指し、アミド官能基と独立して適時金属配位・立体因子による部分脱共役を起こすユニットを窒素上に導入したアミドの反応性を精査した。

【方法・結果】2,2'-ジピリジルアミンから合成したアミド **1** は触媒量の中性金属塩存在下、室温下にて容易にメタノールによる加溶媒分解を受けることを見出した。

得られた(**1a**)₂-Zn の結晶構造では、アミド官能基の Zn²⁺ への直接配位が確認されず、アミドの部分脱共役により本反応が進行したことが示唆される。

^{1,2} (1) Adachi, S.; Kumagai, N.; Shibasaki, M., *Chem. Sci.* **2017**, *8*, 85. (2) Adachi, S.; Kumagai, N.; Shibasaki, M., *Synlett*, **2017**, DOI: 10.1055/s-0036-1590932

